

大原幽学門人の墓について

米谷 博

The Graves of OHARA Yugaku Disciples

はじめに

- ① 大原幽学研究と性学墓
 - ② 各地に残る性学墓
 - ③ 長部村の墓地
- おわりに

【論文要旨】

江戸時代末期の下総地方における大原幽学の農村指導は、農業技術や日常生活にとどまるのではなく村の伝統的習俗にまで及んでいる。しかし、内容によっては古くからの習慣と対立するものもあり、門人たちの活動はそうしたさまざまな問題乗り越えて実践されたものだった。そうした習俗変遷の形跡は門人たちの墓制にも見ることができ、性学関係者の墓地は各地に設立された教導施設に付随して形成されたが、そこでは在地の墓制とは異なる彼等独自の墓制が行われ、現在まで続いている場所もある。しかし明治期後半以降の性学活動の沈滞化にともなって、各地に残るそれらの墓地も開設当所の意味は薄らぎ、現代的な墓地へと大きく変更されつつあるのが現状である。本稿はそうした性学門人の特徴ある墓制を性学墓として捉え、現状および聞き取り情報も含めて関連する資料をできるだけ紹介することを第一の目的とした。併せてこれまで研究対象とされてこなかった性学墓を、幽学研究の舞台へはじめて登場

させようとするものである。

今回紹介した性学墓の事例は、下総地方だけではなく近江や箱根にまで及んでいるが、こうした広がりには性学門人の活動範囲が明治初期に広まったことと対応しており、そういった意味では関係地域にまだ確認されていない墓地が存在している可能性もある。しかし今回確認し得た十件の事例を見ただけでも、性学墓の特徴として頂上を尖らせた墓石、材質は安山岩製、男女別墓域の使用、墓域の土塁囲み、被葬者一人で一基の墓石を建てる、などといった点を見出すことができた。また、近江地方の性学墓では遠隔地でさえも下総と同様の墓制を貫き、あくまでも性学墓にこだわろうとした性学教団の強いこだわりを見ることができた。こうした性学墓の基盤は幽学の時代に始まりを確認できるものの、厳格なまでに規律化されたのは、性学活動が精神修行的側面を強めた二代目、三代目の教主の時代のことだった。

はじめに

東下総周辺（千葉県香取、海上、匝瑳郡）に残るさまざまな石造物を見てゆくなかで、この地域には「性学^{せいがく}の墓」（以降、性学墓と略す）と呼ばれる特徴的な墓石を建てる墓制があることを知った。それは大原幽学の教えを受け継いだ性学の家が行っている墓制で、埋葬の方法や墓石の形態、それに墓地の使い方などがその地域の葬送習俗とは異なり、とくに性学の家が多い地域では共同墓地から独立して埋葬地を設けるほどになっている。

大原幽学についてはこれまでに膨大な研究蓄積があるにもかかわらず、こうした性学墓については概説書で若干取り上げられてきた程度で、文献史学の研究対象としては取り上げられてこなかった。そのため、性学墓が存在するという情報すら殆ど知られていなかったといえる。

しかし、性学が盛んであった香取郡干潟町や山田町などでは、近年共同墓地の整備が進められており、性学墓も当初の面影を失いつつある状況となっている。またその墓地を利用してきた家でも、性学の家として行われてきた葬制が曖昧となってきたり、こうした傾向は香取郡以外の遠方に存在する性学の墓地ではさらに顕著なものとなっている。特に何代か前の家族が個人的に性学の教えを実践していたという家では、現在の当主まで性学との関係が伝わっていない場合も多いため、一層、在地習俗への回帰が進むようである。

国立歴史民俗博物館の東総地域の研究会でも、性学の墓地が整備されてしまいう前に実測しておこうと、山田町に残る二箇所の墓地を調査してきたが、性学の家に生まれその習俗を受け継いできた人たちからの聞き取り情報の記録も、緊急課題となっている。

そのような理由から、現段階では各地の事例をまとめて紹介すること

が、性学墓の記録という点で急務と考えられるので、ここでは墓石だけではなく現地での聞き取り情報や文献資料も併せて活用し、性学墓の全体像とその特徴を紹介することとした。

①大原幽学研究と性学墓

まずこれまでの大原幽学研究のなかで、性学墓がどのように取り上げられてきたのかを見ておきたい。

大原幽学は天保年間に東下総地方の農村を舞台に、性学という合理的思想によって村を復興させた人物として知られている。幽学の説く性学は家や子孫の永続を目指す農業及び家族を重視した啓蒙主義的思想であり、その実践活動は農作業から日常の生活規範にまでおよび、対象は大人や子供、男女を問わず村人全てを含むものだった。

性学が受け入れられてゆく過程としては、まず村内の上層農民である村役人層に易などの教養として受け入れられ、彼らが自村の経営に性学が有効であると判断して、しだいに村民全体へ広まっていたことが知られている。⁽¹⁾ 幽学も最初から村政改革を説いて歩いたわけではなく、あくまでも易などを専らとした文人相手の遊歴の学者であったが、その見識の高さから村の経営等を相談される立場となり、村内の指導を乞われ、やがては定住するに至ったのである。

先祖株組合や換子教育などの独特な仕法については、中井信彦氏や明治大学の木村礎氏をはじめとした共同研究グループによって緻密な研究成果が蓄積されている。⁽²⁾ しかし合理的思想が如何に村の建て直しに適したものであったとしても、実際に村側がそれらをどう受容していったのかというのは非常に大きな問題である。というのも当然そこには村内でも伝統的習俗に固執する立場と、性学仕法の合理性を説く側との、習俗の改変をめぐるさまざまな対立が発生したであろう事が想像できるからで

ある。まして改革が個々の家だけの問題ではなく、村全体にも及ぶ規模なものになると、村民全体の合意を得るだけでもかなりの困難があったと思われる。

つまりこの問題では、それまでさまざまな意味で村内の秩序維持的役割を果たしていた伝統的習俗の中へ、幽学の説く新しい合理的思想がどのように入り込み、衝突を繰り返しながらも受け入れられるのか、もしくは排除されるのかという、村側の対応を考えることが重要になってくる。そしてそれを明らかにするには、幽学の理想を反映している思想的側面からではなく、村側からの視点でこれらの活動を見て行く必要があるのはいうまでもない。

これまでの膨大な研究史のなかで、幽学を受け入れる村側の状況というのは、社会経済的な側面からの研究が進められてはいたが、幽学の指導で習俗がどのように変化したのかという視点はなかったといつてよい。そうした中で高橋敏が指摘した、幽学の仕法が在地の伝統習俗を幽学色に改変していったという視点は注目される。そこでは村再建のために大掛かりな年中行事を簡略化させる方法として、村の伝統的習俗を全面的に否定・廃止をせずに農業を第一としたうえで不必要な習俗を見直し、代わりに新たな性学の行事を創造させて、それを村の行事へ組み込むことで、村人の心をそこへ結集させようとしたことが指摘されている⁽³⁾。

では墓制についてはどうかであろうか。墓制というのはその地域において共通に認識されてきた他界観であり、葬送などのように非日常的な儀礼行事としての意味合いが強いものなので、計画的な改変というのは非常に難しいかと思われる。また墓地については近世の土地制度や寺檀制度にも関わる問題でもあり、支配層からの命令ではなく自発的に墓制を変えるといえるのは、村内での違和感もかなりのものだったのではないだろうか。そのような意味からも墓制に注目する事は、村における伝統的習俗と新しい合理的思想の関係を考える上で非常に有意義といえよう。

幽学の多岐にわたる仕法に詳細な検討を加えた考察は多数あるが、幽学と墓制を正面から取り上げた研究はほとんどなされてきていない。それは史料上の制約も大きく、幽学が墓をどのように考えていたのかを直接記した史料は管見のところ見つからないし、また幽学の著書にも墓に関する思想的な側面などは見出せないことによるものである。性学の仕法を根本的に再検討した木村礎も、史料上の制約を理由に性学墓については詳しく触れてはいない⁽⁴⁾。

しかし、幽学が嘉永五年以降に取調べを受ける段階で作成された史料には、若干ではあるが墓制の改革が記載されているので、幽学が長部での活動中に何らかの墓制改革がなされたのは確実である。また現在残る性学墓は幽学の指導であると伝承されているものの、墓石の残存状況からすると、幽学の時代に性学墓の思想面や物質面全てが形成されたのではなく、近代における偉人像形成の中で仕法の多くが幽学と結び付いていった可能性もある。

幽学の教えと性学仕法は二代目教主となった遠藤良左衛門、そして三代目の石毛源五郎へと受け継がれてゆくが、指導者の交代に伴ってその内容や思想も若干の変化をみせる。とくに石毛の代になると農業よりも精神修行を重んじる宗教的性格が非常に強くなってゆき、門人集団の内部分裂騒動がおこって、性学組織は大きく変化してゆくことになる。そのような過程で、明治十八年に石毛源五郎は山田町府馬地区の性学門人の墓地を在地の共同墓地から独立させ、新たな場所へ開設して行く。その経緯については以前、別稿で検討したことがあるが、そこでは門人たちが行政を意識した合法的な手段で運動を展開していった姿勢を見ることができた⁽⁵⁾。

こうした精神面を重視する傾向に変化していった背景や、現在見ることが出来る統一規格の墓石に明治期以降のものが多いことを考えると、性学墓が幽学の時代に始まったとしても、それは精神的にも物質的にも

現在伝えられているような性学墓が完成したとはいえず、それぞれの教主の代で改変が加えられて、現在の形になった可能性が非常に高いと思われる。

各地の事例を取り上げる前に、これまで紹介されてきた性学墓に関する記述を踏まえておく。

性学墓を性学門人固有の墓制として最初に取り上げたのは飯田伝一であろう。彼は昭和九年の『大原幽学の事蹟』のなかで、門人たちは八石教会の奥に台地を開いてそこを代々の教会主の墓地にしようとしたと記載している⁽⁶⁾。また墓地の改善として、性学は墓地を清潔にする集団であることを取り上げ、長部の墓地のことを、周囲に土堤を築いて佳木草珍を植え、毎月掃除を励行する霊場の名に相応しい墓地であると紹介している。また各地に存在する門人の墓地がいずれも清潔にされているのは、幽学の墓地改善が尋常ではない徹底したものだったからであり、その精神的根柢となっているのは『大学』の修身の教えによるものだと紹介している。このように飯田は幽学が墓地に対して非常にこだわっていたことを取り上げ、その根本には先祖への孝行という点があり、それが幽学の墓制指導の重点となっていたのだとしている。

その後の千葉県教育会『大原幽学全集』⁽⁷⁾は巻末の「幽学の社会改良事蹟解説」で墓地を取り上げており、法則墓石として正面図および寸法を次のように記している。

墓石	七寸角	高サ一尺九寸
台 右上段	一尺二寸角	高サ七寸
同 中段	一尺八寸角	高サ七寸
同 下段	二尺四寸角	高サ七寸
計		高サ四尺

正面図では台石を三段に積み重ねその上に柱状の墓石をのせたものを描き、特徴的な点として頂上が尖った形を載せている。そして先祖への

孝行として崇拜の念を高めるために、幽学は墓地を改善させ長部の墓地に見られるように周囲に土堤を築き、佳木・珍草を植えて毎月清掃させたのだという。

現存する墓石の大きさは、ここに示された数字と一致するものばかりではないが、おおむねこれに近い形態である。その後、越川春樹も『大原幽学研究』⁽⁸⁾で『大原幽学全集』の墓石記事をそのまま紹介しているが、性学の墓石が規格性を持っているのは、立派な墓石を建てることに門人たちが見栄を張り合わないようにするためだと指摘している。

これらの先行研究の性学墓の取り上げ方に共通しているのは、幽学が性学墓を創作し指導したとしている点であるが、いずれも根柢が非常に希薄であることは否めない。偉人顕彰の過程ですべてを個人に帰結してしまうことはよく見られることであり、幽学没後に形成された仕法でありながらも、幽学が創始者として伝承されているものもあるので、このような墓制が幽学の指導によるものとは、一概に断言できないわけである。これらの先行研究により、性学門人が独特の墓制を行っていたことは世に紹介されたが、史料の根柢が薄いこともあって、性学墓は文献史学の研究対象から外れてしまっている。

②各地に残る性学墓

筆者がこれまでに確認できた性学墓は表1のとおりで、いずれも性学の関係施設に付随してその近くに営まれている。幽学の没後にはこの表以外にも性学の教導施設が設立されているので、それらの場所付近にも門人のための墓地が開かれていた可能性もある⁽⁹⁾。

それぞれの墓地の紹介に入る前に性学墓の特徴について触れておく。性学墓の定義については、門人の間で共通の規定が認識されていたのであろうが、文書に記されたものは残されていない。そこで性学の家で聞

表1 性学に関する墓地一覧

(平成13年現在)

No.	墓名(現地での呼称)	場 所	開設年	特徴その他
1	長部の男墓、女墓	千葉県香取郡干潟町長部	弘化3年頃	男女別墓地、門人共同墓地、土塁囲み、性学型墓石、安山岩製
2	宿内の墓地	千葉県香取郡干潟町錦木	嘉永4年頃	男女別埋葬、門人共同墓地、土塁囲み、性学型墓石、安山岩製
3	諸徳寺の菅谷家墓地	千葉県香取郡干潟町清和甲		性学型墓石、安山岩製
4	小日向の共同墓地	千葉県香取郡山田町府馬	明治元年	門人共同墓地、土塁囲み、性学型墓石、安山岩製、階級別、茶葉と甕に詰める
5	婦命台の性学の墓	千葉県香取郡山田町府馬	明治18年	男女別埋葬、門人共同墓地、土塁囲み、性学型墓石、安山岩製
6	青木ヶ峰の遠藤良左衛門墓地	滋賀県甲賀郡石部町	明治6年	個人墓、石垣囲み、性学型墓石に類似、花崗岩製
7	善隆寺の墓守の墓	滋賀県甲賀郡石部町		遠藤良左衛門墓守り二人の墓、境内墓地、性学型墓石、安山岩製
8	丸山の性学の墓地	滋賀県甲賀郡石部町	明治6年頃	土塁囲み、門人共同墓地
9	箱根山中新田接待茶屋の墓地	静岡県三島市	明治18年	土塁囲み、門人共同墓地、性学型墓石、安山岩製
10	万松寺の大原幽学墓	愛知県名古屋市中区平和公園	明治7年	在地形式、境内墓地、空襲による破損大、非性学型墓石、御影石製

き得た断片的な情報や、墓地の現状などから性学墓を規定するとすれば、広い意味では門人の墓ということになるが、周囲の墓制との相違点から考えてゆくと、以下の点を性学墓の特徴としてあげることができよう。

①墓地の周囲や個々の墓石を、土塁や石塁などで囲む。

②性学型の墓石は台石を三段に重ね、その上に四角柱で頂上が尖った兜巾型の棹石をのせる。

③台石と棹石の大きさは、どの墓石もほぼ同じ規格である。

④墓石は被葬者一人で一基を使用する。

⑤碑面は正面に戒名、右側面に没年、左側面に出身地や享年を刻むなど、銘文を刻む面がほぼ一定している。

⑥石材は安山岩を用いる。

⑦埋葬地を男女別にする。

⑧素焼きの甕に茶葉を詰め、そこへ遺体を入れて埋葬する。

上記の八項目の全てを備えていない例も多いが、地域において性学門人の墓と認識されている墓もここでは性学墓として対象に加えておいた。以下、それぞれの墓地について紹介するが、表中No.1の長部村の男墓、女墓については次節で詳述し、またNo.3の菅谷家墓地については確認したものの詳細な調査は未着手なので、ここでは性学墓の存在を紹介するだけにとどめる。なお、No.4と5の山田町府馬地区の性学墓については、以前墓石の形態や墓地開設の経緯とともに紹介したことがあるので、本稿では特に取り上げない。詳しくはそちらを参照していただきたい。⁽¹⁰⁾

1 干潟町錦木 宿内地区の共同墓地(No.2)

錦木村は性学の拠点となった長部村八石から南西方向に約2km離れていたが、その宿内地区に幽学の指導によって計画的に開かれた集落がある。この開設については、同所に立つ明治四十三年の開拓記念碑によると、嘉永三年から開拓事業が始められ翌四年に完成し、開拓時には六

軒が入植したとある。現在でもそれらの屋敷前には区画整備された耕地が広がり、後ろに小高い山を背負う、性学が考えていた合理的な景観を見ることが出来る。そして字長津台という場所には、集落に付随する共同墓地が設けられているのである。ここは宿内だけの共同墓地という性格上、性学の考えていた墓制観がそのまま反映されていると思われる。この墓地については開設の経緯を知る上で興味深い記録があるので、次にそれを見てみよう。

嘉永五年に長部村にある性学の教導施設の改心楼へ、無宿人らが乱入する事件が起こるが、その対処方法のまずさから門人たちは関東取締出役から嫌疑をかけられることになる。そして性学の活動を調べるために関東取締出役は、同年六月に滞在していた香取郡佐原村へ鍋木村の平山忠兵衛を呼び寄せ、幽学や性学の活動内容などを尋問した。平山は天保五年に神文を提出した性学門人であり、この地域では屈指の豪農であった。そのときの尋問記録がこの「嘉永五年六月八州御取締御出役衆より性学之筋内々ニ而御尋問ニ付御答之扣」である。これは、昭和十八年の古城村教育会編『古城村誌 前編』に紹介されているが、宿内の墓地のことも取り上げているので、関係する箇所を以下に抜き出してみよう。⁽¹⁾
なお文頭に「中」とあるのは関東取締出役の中山誠一郎のことで、平山忠兵衛の発言には筆者が(平)と付した。

(中略)

中「鍋木村でも九軒一同にかたえん所へ家作いたしたそふだ」

(平)「左様にござります」

中「新規に墓所を拵たそふだ」

(平)「御意に御座ります、此もの共家作いたしました所ハ本村より半里もへだたり墓所遠く不勝手の処、幸ひそばに山地にて菩提所の所持のやぶがありましたを、ばたい所と相談にて墓場にかまひましたそうふで御座ります」

中「新墓だらふ」

(平)「ハイ新墓と申せば申やふな物で御座りますが、むかしハ墓場の様子で塚が御座ります」(以下略)

ここでは新たに家作したのは九軒となっているが、現地の開拓記念碑は六軒とある。この相違については木村礎も指摘しているが、現段階では史料的な根拠を見出せないもので、ここでは保留とせざるを得ず、これ以上は触れないこととする。

文中の「かたえん所(片縁所力)」とは宿内のことであり、そこへの家作とともに墓地も開設しているのである。平山はその墓地開設が菩提寺とも合意の上であることや、本村より離れた遠方ゆえに仕方なく開いた経緯を説明している。

このやり取りの中で、関東取締出役が新たな墓を開いたのかという点に重点を置いていることがわかる。これは墓地が年貢の対象外地となることから、出役としては意図的な脱税意識があったのかどうか気になる点なのである。それに対する忠兵衛の返答としては、新墓ではあるがもともと塚があつて墓場のような場所だったと、墓の開設は認めながらも全くの新規ではないことを匂わせている。

次に宿内の墓の特徴について平成十年九月に筆者が現地調査で得た情報をもとに、概況を紹介しておきたい。話者は来栖良平氏(大正三年生)で、来栖家は開拓当初に入植した六軒のうちの一軒である。

(一) 墓地

墓地は宿内地区字長津台という場所にあり、現地では「おほか」とか「ぼち」と呼んでいる。宿内地区に開拓当初から入植したのは六軒で、明治期になって新たに入植してきたのは二軒と伝えられている。宿内の家数は現在三五軒で、長津台の墓地を使用しているのは宿内地区の家だけである。

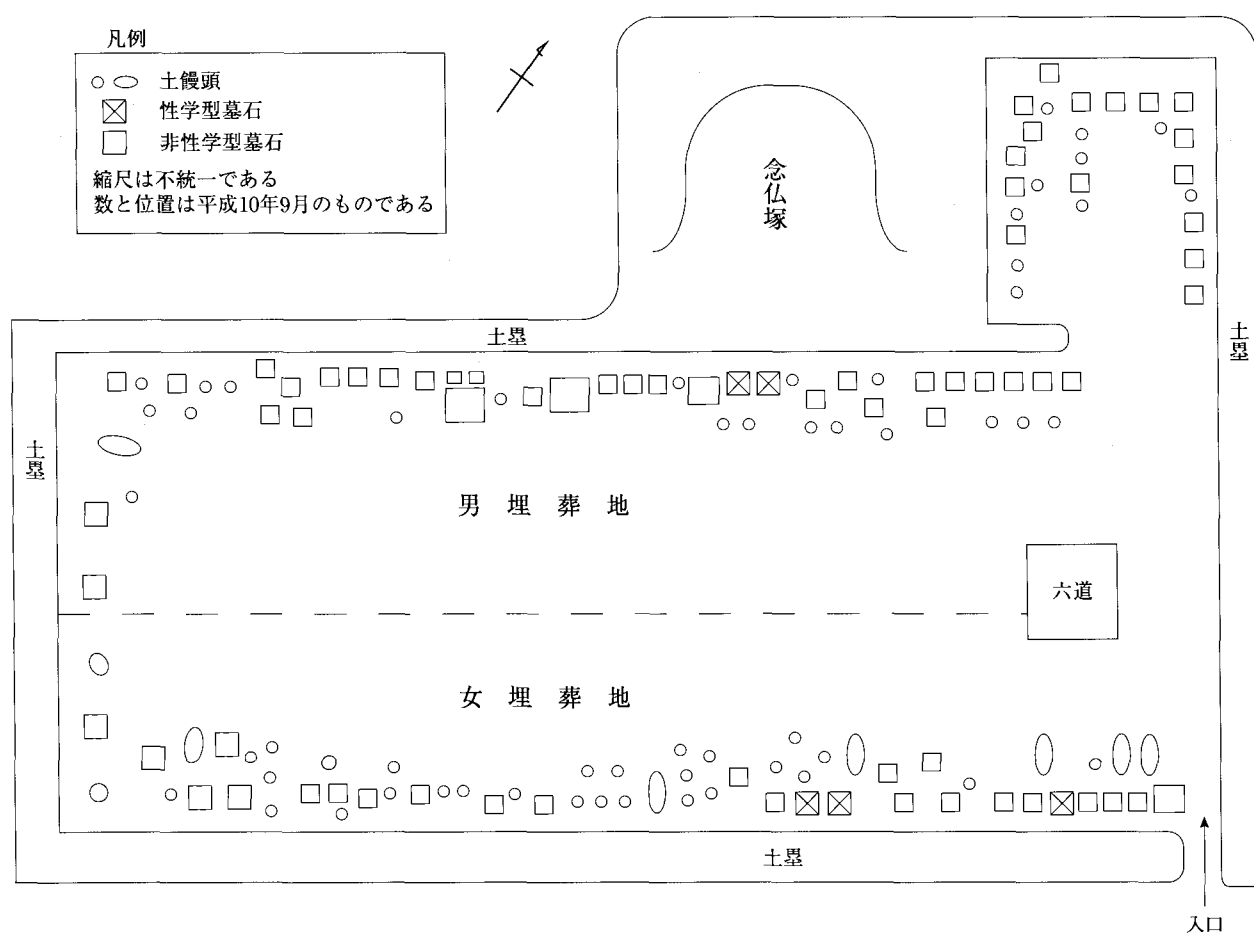


図1 宿内地区の墓地見取り図

墓地の北東の角に入り口があり、そこから左手に広がっている。周囲には土塁が巡らされているが、以前はもう少し高く盛られていたとのことである。墓地の使い方も決まっていた、六道より奥に向かって右側を男、左側を女が使用するというように分かれている。来栖氏によれば夫婦の場合は向き合うような位置に埋葬し、夫婦連名の墓石一基だけを男側に建てるのが性学の方法であるという。最近立てられた墓石の中には女側に夫婦連名のものもあるので、その約束事も守られなくなっているようである。

向き合った位置で墓地の両側に各家のまとまりがあり、奥の方から古い家を使用していった関係で、手前ほど新しい家となっている。また、北側に飛び出た一角にまとまって墓地を形成しているのは、近年になって入ってきた家の墓地である。また念仏供養碑が土塁の外側の塚上にあり、これが先にみた嘉永五年の調書にあった念仏塚と思われる。

(2) 墓石

平成十年九月の段階で、この墓地の埋葬施設として土饅頭が六六点、墓石が七七点、総数一四三三の埋葬施設を確認することができた。そのうち墓石に見られる被葬者数を集計したのが次の表2である。

男女連名の宝永八年の墓石が一点のみ確認できるが、これは本村より移動してきたものといえ、それを除けば嘉永三年から墓石が建てられ始めている。そして性学墓の特徴の一つである、被葬者一人の個人用の墓石が全墓石数の約四割を占めている。一般的に東下総地方の墓地では近代になると夫婦連名の墓石が多くなる傾向が見られるが、

表2 被葬者数別墓石数一覧 ()内は女性

(平成10年9月調査)

造立年代	1人	2人(同性)	夫婦力	家族力	家(集合)	不明	計
1711(宝永8)～			2				2
1850(嘉永3)～	1(3)		3				7
1860(万延1)～	1(1)		1				3
1870(明治3)～	1(2)		1	1			5
1880(明治13)～	1(1)					1	3
1890(明治23)～	2(2)		2	2	1	1	10
1900(明治33)～		1					1
1910(明治43)～	2(2)		3	1			8
1920(大正9)～	1(1)				1		3
1930(昭和5)～	0(2)		2	2			6
1940(昭和15)～	1		1	2			4
1950(昭和25)～	1(1)	1	2			1	6
1960(昭和35)～	1		2	1	1		5
1970(昭和45)～	0(1)				1		2
1980(昭和55)～	1				3		4
1990(平成2)～			1		4		5
不明	1					2	3
合計	14+(16)	2	18	9	11	5	77

宿内の墓地では昭和期まで一人で一基という墓石が立てられている。また、形態からみると角柱のものが多く、三段の台石の上に頂上の尖った棹石を載せるという性学の特徴的な墓石は、明治十三年から昭和十五年までの五基のみで全体の一点でも満たない。つまりこの墓地では、一人で一基の墓石を用いるという点では性学の墓地としての特徴を備えているが、形についてはそれほど性学の規格にこだわる傾向は見られない。

(3) 葬儀

土葬をおこなっているが、棺桶が以前と違って寝棺を使うようになったので、埋葬場所の狭さが深刻になってきている。平成十年に埋葬した入り口付近では、墓地の真中近くまで土が盛り上げられるようになり、奥の方での墓石工事に支障がでたという。石を建てるのは何年か経て、盛った土が平らになってから建てるということであった。

棺桶を担ぐ人を「せんどろ」と言い、当家の両隣の男四人が行い、そのうちの二人が穴を掘る「くらほり」という。ただしせんどろ役の妻が妊娠中の時はその人を外し、町内で違う人に担当させる。それは長部地区でも同じ話を聞くことができた。

菩提寺は宿内に入植する前からの本村のお寺との関係が続けており、鐺木の願勝寺(真言)が最も多く、そのほかに鐺木の妙経寺(日蓮)や八日市場市大寺の龍尾寺(真言)などもある。

(4) 小結

以上、現況を紹介したが、嘉永三年から墓石が登場してくることを考えると、集落の開発と同時期に開かれた性学門人の墓地として間違いないうだろう。幽学時代から続く墓地であり、宿内以外の家は使用していないという経緯からすれば、性学墓の特徴をもっとよく伝えているといえそうだが、頂上が尖った墓石はそれほど用いられてはいない。それでも被葬者一人に対し一基の墓石を使用することや、土塁で墓地を囲むという特徴はみることができる。

こうした傾向については、幽学没後における宿内地区の性学活動を踏まえておく必要がある。というのはこのころの性学組織は、明治十年代に行政が行った墓地整備の政策に対応して、積極的な墓地開設活動を行っている半面、三代目教主である石毛源五郎が掲げた精神修業的な性学が、あまりにも幽学の教えから変質してきたために、性学活動に消極

的となる門人や地域も現れたからである。

幽学の時代に開かれ独立していた宿内の墓地であるが、幽学没後は本村の伝統習俗の影響を受けていったということなのであろう。宿内地区の門人の動向を確認しているわけではないので推測の域を出ない解釈であるが、ここでは結論を急がずに他地域の事例とあわせ後日再考してみたい。

2 石部町周辺の門人墓地

石部町と大原幽学門人との関係は、明治六年八月に二代目教主の遠藤良左衛門が京都へ行く途中に、東海道の石部宿で亡くなったことから始まる。遠藤の遺体は当時石部の駅長であった服部仁兵衛の土地寄進により、青木ヶ峰という場所へ葬られ墓が建てられた。そして、遠藤の墓守として香取郡溝原村の鈴木利喜太郎と静岡県土族の仁瓶慎則の二人の門人が残ることになり、また下総から来た三代目教主の石毛源五郎らも加わって、近江での性学の活動が始まることになる。⁽¹²⁾ 石部尋常高等小学校長を勤める奥村末吉が、明治四十年に著した『石部郷土史』⁽¹³⁾ にはそのことについて次のように記されている。

丸山ハ西寺道ノ左ニアリ、此ニ八石教会アリ。下総ヨリ会員来リ住シ青木ヶ峰ニアル遠藤氏ノ墓ヲ守ルトイフ。

遠藤が亡くなってすぐに墓地を作っているので、建立にあたっては下総から来ている彼らの意見が非常に強く反映しているといえ、二ヶ月後の十月に完成した墓石には、下総門人たちのイメージしていた性学二代目教主にあさわしい墓制観が現れているはずである。そういった意味でこの墓は、性学墓を考える上で注目する意義は十分にあると考える。

長部などの干潟地域と石部との関わりについては木村礎「性学組織の拡大と思想的変質」⁽¹⁴⁾ に詳しいのでそちらに譲り、ここでは遠藤の墓や墓守としてこの地で亡くなった二人の墓と、石部地方の門人のために開設

された丸山の墓地をとりあげる。また、この地の性学の家に生まれた小向寅市氏（大正十二年生）から聞き得た石部地域の性学に関する情報も紹介して行きたい。

香取郡府馬村（現、香取郡山田町）から嫁いで来た寅市氏の母親は、明治三十五年生まれで九十四歳で亡くなったが性学の教えを重視していたので、寅市氏も性学の家の子として礼儀などは厳しく躾けられたという。⁽¹⁵⁾ 門人の活動場所としては小向家の前に性学のための教会があり、これは長部にある大原幽学旧宅とそっくりの家屋を新たに建てたもので、そこが活動の拠点となっていた。教会の建設時期やそこでの活動内容については詳しく聞くことは出来なかったが、寅一氏の記憶では、太平洋戦争後は性学に結びつく活動は行われなくなり、おばあさん達の茶飲み会的な集まりが続いていた程度とのことである。今ではそれもなくなくなり、無住の廃屋として建物のみが残っているだけである。

そのほかに開設時期は不明であるが「おとこべつとうじょ」（男弁当所）と呼ばれた集会施設が青木ヶ峰の遠藤の墓地近くに、同様の「おんなべつとうじょ」（女弁当所）が石部町の丸山にそれぞれあったという。では遠藤良左衛門の墓からみてみよう。

（1）遠藤良左衛門墓（No.6）

服部仁兵衛が墓地として提供した青木ヶ峰は樹木の茂る台地で、遠藤の墓はその北端に築かれており、その後ろは谷状に落ち込んでいる。現状の墓地は石段を上がった平地に、未整形の花崗岩を積み上げて石垣のようにして中央の墓石を囲んでいる。石垣状の石塁は正面だけが入り口として切れており、その前には「石部村中」で建立した明治十八年五月の石灯籠一対がある。そのほか石塁の内にも、墓石の前に写真のような花立てと灯籠が立っている。

墓石は台石を三段重ねて、その上に頂上が尖った四角柱の棹石をおい



図2 遠藤良左衛門墓

ている。いずれも石部町の東寺地区から産出する花崗岩が用いられている。⁽¹⁶⁾ 棹石の正面に「遠藤先生墓」とあり、左側面から裏面、右側面にかけて遠藤の業績と明治六年十月に墓石を建立したことが漢文で刻まれている。この銘は『石部郷土史』にも紹介されているが脱字が多いので、筆者が校訂したものを次に紹介しておく。また二段目の台石右側面には、建立にあたった主な関係者が刻まれているのでそれも紹介しておくが、■印は摩滅のため判読が不可能な文字である。

(棹石部分)

先生名亮規字良左衛門下総洲香取郡長部村人也年廿有六而入大原先

生門為其學皇典為主兼涉儒仏自脩德又教人耳先生伝其真風保全已人有年焉於是乎入德者不可勝數矣乎先生教人之厚與父母之於子何異是以門弟子皆稱先生唯口老父尚呼無其字者豈有稱其名哉蓋服徒至也其厚而能教化遂達高聽官省召撰奉大義令普布教天下今年秋七月將西布教于洛城途半而病針藥無驗八月廿二日年六十有五而卒于東街石部駅舎誰有不惜者哉將葬遣骸隨從求地舉駅仰先生之德風以為之周施乃有篤志喜合箇良地九月四日以禮埋焉篤志者誰駅長服部仁兵衛并内貴又右衛門也後先生之嫡男良祐子將門人來合議以立石尔于時明治六年癸酉冬十月西京東山吉水沙門雷雨真相志

(台石部分)

訓導 石毛源五郎 下総香取府馬村

同級 鈴木英三 同州同郡溝原村人也

鈴木利喜太郎 同州同郡同村

仁瓶慎則 浜松県旧幕士族

飯寫太郎左衛門

鎌形伝右衛門 下総香取郡長■^(部カ)人也

金井勘兵衛 同州同郡仁■^(良カ)村人也

井上幾太郎 江州■^(部カ)郡八幡人也

右旗中随徒聊メ記其姓名

墓地の開設に大きく関わった服部仁兵衛の名前は見えないものの、下総の門人に加わって地元から井上幾太郎が早くも同級として名を連ねている。

この青木ヶ峰については明治九年の地租改正時に、下総側の門弟たちと服部仁兵衛との間で土地の譲渡に関する証文が作成されており、それは木村礎「性学の分裂と再建」に紹介されている。⁽¹⁷⁾ それによると墓地が一畝二二歩、宅地が一畝一六歩、畑地が六畝二七歩とあり「随徒之衆中草庵ヲ補理御墓守護被成候所」として墓守がここに居住していたとある。

その後、下総の方では明治四十年に門人の組織を八石性理学会として財団法人にするが、青木ヶ峰に関する諸税もそこへ編入させてそれを財団が負担することになる。そのことを定めた同年の「約定書」には青木ヶ峰の土地利用内訳があり、明治九年時の墓地と宅地に山林二反四畝歩と宅地三畝一二歩が増えている。これはかつて墓守が住んでいた宅地だけではなく、前述した男性門人が集まる男弁当所を指していると思われる。

青木ヶ峰の様子は明治四十年の『石部郷土史』にも見ることができる。

青木ヶ峰

大字東寺ト石部トノ境ニ横ハレル丘ニシテ此ニ下総ノ儒者遠藤氏ノ墓アリ、方数十間ノ塋域清掃セラレテ俗物ノ入来ヲ拒ムカノ如ク其中央ニ天然石ヲ以テ方一間ヲ囲ミ、内ニ高サ五尺余ノ墓表ヲ立テタリ、塋域ノ四周又清掃セラレテ参詣者ヲシテ轉感慨ニ堪エザラシム、其碑銘ニ曰ク（以下に記されている碑銘については前述のとおり）

ここでは遠藤良左衛門は儒者となっている。また彼の墓は五尺ほどでその周囲を天然石が囲んでおり、それはまるで俗人が入って来るのを拒んでいるようだとしている。これは編者の印象であって建立者たちの意図ではないが、当時の感覚からすると石塁に囲まれた墓石というのは特別に奇異なものとして映ったことは確かなようである。そして墓の周辺まで行き届いた清掃ぶりは、参詣者を感慨深げにさせるほどであるという。

筆者の能力不足もあり実測図までは用意できなかったが、大まかな数値のみあげれば、地上から頂上突起まで約一七〇cmであり、棹石の横幅と奥行きは共に三六・五cm、高さは頂上まで八五・二cmである。性学墓としては最大規模の埋葬施設である。

(2) 善隆寺境内墓地 (No. 7)

次に遠藤の墓守として石部に残り、そこで亡くなった鈴木利喜太郎と

仁瓶慎則の墓をみてみる。彼らの墓はかつて石部の八石教会近くにあったと伝えられているが、現在は石部町の浄土宗善隆寺の共同墓地内にあり、ここへ移動されてきた経緯や時期は確認できなかった。¹⁸⁾ それぞれの墓石の銘文はつぎのとおりである。

鈴木利喜太郎の墓 (図3左側)

(正面) 仁山義海殉行居士

(右側面) 明治十二乙卯年六月十六日

(裏面) 下総国香取郡溝原村 鈴木利喜太郎

(裏面) 教部省大講義遠藤良規尊師へ随来り師没後御墓守七ヶ年



図3 鈴木利喜太郎墓 (左側) と仁瓶慎則墓 (右側)

二して死去三十一歳也

仁瓶慎則の墓(図3右側)

(正面) 謙岳勇道慎則居士

(右側面) 干時明治廿五辛壬辰十二月十日

(裏面) 静岡縣士族 仁瓶慎則

(裏面) 遠藤尊師へ鈴木利喜太郎と共に随来り師没後御墓守廿年にして死去六十六才也

このように両墓石は、記載事項や碑面の使い方もほぼ同じである。また下総の香取郡域で見られる性学墓の石と比較してみても、頂上を尖らせた棹石と三段の台石という同じ構造である。大きさもそれらと同じ規格で、さらに驚くべきこととして一番下の花崗岩製の台石を除けば、他は香取郡で見られる墓石と同じ安山岩製なのである。

善隆寺境内の墓地には中世末から現代までのさまざまな墓石を見ることができ、現代の家墓を除けば殆どが地元産出の花崗岩を用いており、安山岩製の墓石は彼等の墓以外は見当たらない。つまり墓守り二人の埋葬にあたり門人たちは、下総地方で使用している墓石と同じものをつくり、それをこの地まで運んできたということになる。その生産地がどこなのかはまだ特定できてはいないが、このことは在地の墓制とは別な独自の墓制を貫こうとする性学集団の、墓に対する非常に強いこだわりと見ることができる。

(3) 丸山の墓地 (No.8)

石部南小学校前の石部町大塚地区にある墓地で、寅市氏は丸山の墓地と呼んでいる。墓地の周囲には高さ約2m、上幅50cmもある土塁が巡らされていて、その中央奥に大型の名号碑が惣供養塔として立っている。墓石の数はそれほど多くはなく、墓地内に家単位の新しい墓が数基立っているのみである。しかし、このような土塁で囲まれた墓地景観は、石



図4 丸山の墓地

部の共同墓地では他に見ることのできない特異なもので、香取郡府馬地区の性学墓と同様な施設とみることができる。

寅一氏によれば石部地域の性学門人が亡くなったときは、それぞれ地元墓地へ在地の方法で埋葬していたようで、小向家の共同墓地でも上記のような土塁は設けていないという。また、この墓地の開設年は不明であるが性学に関係していた石部の富永、小向、西尾の三家が出資して開いたもので、当初は千葉方面からきた人たちのための墓地だった。しかし長らく使っていなかったため、第二次大戦後は地元の人々でも使えるようにと南無阿弥陀仏の名号の碑をシンボルとして配置し、周辺の墓

制と同じような墓地として活用されてきたそうである。ここを現在使っているのは丸山と麻田地区人々で、性学とは関係の無い人たちである。いくつか混じっている古い墓石も他所より移動してきたものである。

(4) 小 結

以上のように、性学二代目教主である遠藤の死を出発点として始まった近江の性学であるが、墓をみると遠藤の墓だけが下総地方の事例と石材と規模という点で大きく異なっていた。それでも石塁囲みや三段の台石の上に頂上が尖った棹石を置くという、形態や付属施設については共通点を有しており、墓石建立の背景には他の性学墓と同じ意識があったと考えられる。遠藤は幽学の筆頭門人であったが、没した当時は幽学と同じ教主であるので、そうした階層による差が墓に現れているのかもしれない。つまり一門人ではなく、近江の性学においては初代ともいえる立場であるので、今後教主の墓として門人たちが墓地を参詣することを考慮に入れて、あえて壮大な墓地空間を設けたとも考えられる。そして、この墓が性学墓の一つの画期となっていることは間違いないであろう。

また、善隆寺の墓守り二人の墓石は、石部が石材を産出する地でありながらも、下総と同じ石材、同じ規格で作られており、そのことは墓に対して特別な意味を持っていた彼等の意識を見ることができた。丸山の墓地については、門人の墓域として築かれたものの未使用だったこともあって、性学の規格性のある墓石は見られなかったが、外観としては周りを土塁で囲むという下総と同様の特徴を見ることができた。

以上のような、下総からの門人達が持っていた墓への意識を、近江の門人たちも納得して受け入れたからこそ、遠藤の墓地や丸山墓地の開設など大規模な普請事業が可能だったのである。

3 箱根接待茶屋の門人墓地 (No. 9)

東海道の箱根越えは難所として知られているが、江戸時代の中ごろに旅人の難儀する姿を見て箱根山金剛院の僧侶如実が、旅をするものに無料で粥や飼葉の施しを始めたといわれている。その後文政七年には、江戸の商人加勢屋与兵衛によって接待茶屋が設立され、道中奉行の認可の下に営業が始まったが、幕末維新の混乱の中で閉鎖しており、それを明治十二年に再興したのが八石性理教会であった。その運営の歴史については接待茶屋の発掘調査報告書や、鈴木とき『大原幽学 遠藤亮規と山中新田接待茶屋』⁽²⁰⁾に詳しいのでここでは概要だけを紹介して、それから残っているこの施設の付属墓地の紹介を行いたい。

性学が接待茶屋と関わりを持つようになったのは、二代目教主の遠藤良左衛門が明治六年ここを利用した際に、茶屋の施行行為が八石性理教会の精神と合致すると考えたことから始まった。遠藤は明治六年に石部で没してしまいが、明治十二年当初は教会としてこの茶屋の運営にあっていたので、香取の教会からも資金の援助があり、現地にも門人たちが詰めていた。また前述の石部での性学活動が活性化するにつれて、石部と香取との行き来も活発になり、中間拠点としての役割もこの茶屋が持つようになっていったのである。そのような街道の施行所というだけでなく性学活動のための施設でもあったため、ここにも性学門人のための墓地が開設された。

『大原幽学 遠藤亮規と山中新田接待茶屋』は教会から離れてしまった茶屋の運営を、鈴木家が献身的な努力によって継続してきた経緯を丹念に紹介しているが、そこには墓地について次のような記載が見える。もっとも、茶屋では絶対に(ばくちを)打たせなかったのだが、茶屋の裏の馬道の近くにあった「茶屋の墓地」が、四方土手に囲まれていて人目につかなかったので、彼等(雲助)のかっこうの場所に

なったのである。

これは明治三十八年から接待茶屋で働くようになった鈴木とめの話である。そのころの茶屋の墓地在四方を土手（土塁）に囲まれていたという景観の記載は注目される。

この茶屋の墓地については、とめの孫にあたる昭和三年生まれの鈴木昇氏が現在管理しており、茶屋のあった場所の向かい側の台地上に開かれている。周囲は雑草や低木が生い茂っているが、墓地までの道や墓地内は整備されており全体的な形ははつきりと残っている。以前この墓地内では樹木栽培をしていたので、その名残もあって細い木々が乱立している。

墓地は縦横ともに二〇m位で、其の周囲を幅一m高さ一m位の土塁が囲んでいる。土塁内への入り口は真ん中から少し右側に寄った位置にあり、そこだけ幅二m位土塁を切つてある。鈴木氏がこの墓地の由来として聞いているのは、箱根の峠越えで亡くなる多くの人を、性学教団が埋葬・供養するために開いたということである。

ここに立つ墓石は入り口から向かって左から、石毛源五郎、鈴木家の墓、金杉伝次兵衛の三基だけである。

鈴木家の墓は「鈴木家之墓」と刻まれた現代的な角柱型の家墓と「賢譽功德積善儀應居士」と刻まれた力三郎の墓があり、そこにとめ・力之助・万太郎・ときの四人のことを記した墓誌がある。

三代目教主の石毛源五郎の墓石は、高さ一〇一cm、横、奥行きとも一辺一八cm角の柱状である。石毛源五郎の墓については前掲の『大原幽学遠藤亮規と山中新田接待茶屋』に「（石毛）の死後の接待茶屋への埋葬に至る経緯まで、実に話題は多かった」と興味深い記述がある。それによれば石毛源五郎は石部で亡くなり、腐りかけていた遺体をここへ埋葬し、石毛の実家のある山田町府馬の婦命台墓地には、髪の毛だけを埋めたという。このように分骨埋葬した経緯などについては、鈴木昇氏から

特別なことは聞くことはできなかった。

金杉伝次兵衛の墓石は頂上が尖った兎巾型で、石材も香取で使用されていたものと同じである。ただし一番下の白石だけは厚みがなく別材である。

石毛と金杉の二基の墓石銘は次の通りである。

石毛源五郎（規方）の墓石（図5）

（右側面） 千葉縣香取郡府馬村府馬

（正面） 石毛規方墓

（左側面） 大正四年卯三月十三日

行年八十四才

金杉伝次兵衛の墓石（図6）

（右側面） 下総国香取郡古城村

金杉傳次兵衛

行年七十三

（正面） 騰譽本因勤覺居士

（左側面） 明治廿六年癸巳十月七日没

茶屋の跡から近いところに親戚にあたる鈴木静二家があり、そこには接待茶屋で使った大小の茶釜二点と茶屋で使った湯飲み茶碗や看板、茶屋開設に関する古文書類が保管されている。²¹ そのなかに明治十八年に墓地として土地の借用を願った依頼書があり、場所を示す図面と共に綴られている。

箱根山施行平接待茶処接続地借用御依頼之書

字施行平

一 叢地 拾間四面

此 地坪 百坪

右之地所當施行平接待茶処より丑寅之方山合之地所、別紙絵図面之通借用之上取役置接待ノ詰合之者萬一死亡有之候節埋葬致度、国許へ



図6 金杉伝次兵衛の墓石



図5 石毛源五郎（規方）の墓石

者遠路之事故、諸事不都合之儀も有之可相成儀ニ御座候ハ、相當之地税相納永代借用仕度御協議之上、御承諾有之度、此段及御依頼候也

明治十八年三月三十一日 下総国兼取郡長部村

八石性理学会より出張

東京府士族 鳥居正則 ㊦

同平民 石毛惣四郎 ㊦

函嶺一駅

五拾貳ヶ邨御取締

惣代御中

これに拠れば墓地としての借用地の面積は拾間四方の百坪とあるので、現在土塁の廻っている範囲を指すと思われる。またこの墓地を使用するものは「接待ノ詰合之者」とある。これは茶屋に詰めている性学側の人たちを指しているといえ、当初から性学門人のための墓地だったことが分かる。なお八石からの依頼人として登場する鳥居と石毛については、現段階では詳しいことは不明である。

実際に接待茶屋で死亡する例が多かったのかは記録がないので分からないが、同家の文書のなかに茶屋開設にあたり、門人の間で交わした議定書がある。⁽²²⁾ それには施行平に勤める門人たちの心得について定められており、それは性学教団が各地に開いた性学の丹精の場の一つとして茶屋を記している。つまり茶屋は通行者のための施設であるとともに性学教団が丹精を实践するための施設でもあるので、その墓地は性学の施設に付随する墓地として意識されていたといえ、このことは施設に付随した墓地を用意する他の性学施設と同様な考えと見ることができる。

4 名古屋市平和公園万松寺の幽学墓（No.10）

大原幽学は自らの出自については最期まで明らかにしなかったが、門

人の間では尾張藩家臣大道寺家の出と認識されていた。その説に基づき同家の菩提寺である名古屋の万松寺には、明治七年に門人たちによって幽学の墓石が建立されている。この墓石は写真等でよく紹介されるので有名であるが、その建立の経緯についてはあまり取り上げられてはこなかった。

この墓石に関して最初に注目したのは水谷盛光氏である。同氏は名古屋周辺の文献資料を調査する中で見出した大原幽学の生前と没後の二件の史料をもとに、尾張出身と言われる幽学の出自について考察している。⁽²³⁾

一件は嘉永五年に江戸で行われていた幽学の身元取調べに関連して、江戸からの問い合せに対する地元代官より尾張地方へ発せられた幽学の身元確認のための触れである。もう一件は明治初期の名古屋において、雑学者としてさまざまな出来事を書きとめていた小寺玉晃⁽²⁴⁾の日記で、そこには香取郡から幽学門人たちが幽学の墓石を建立するための相談に玉晃のもとを度々訪れている記載がある。

いずれもこの二件を取り上げた水谷氏の研究は、これまでの幽学研究には無かった分野のものであったが、幽学の出自を主な課題としていたので、本稿で対象とする墓石建立の経緯についてはそれほど詳しくは取り上げていない。しかし墓石建立に関する内容も多分に含まれている史料なので、以下では水谷氏の作業に導かれながら、名古屋の幽学墓について見ていきたい。

(1) 墓石の現状

幽学の墓が所在するのは、愛知県名古屋市千種区平和公園内の曹洞宗寺院万松寺墓地の一角である。ここは戦後の復興事業の一環で市内の墓を移転した場所であり、万松寺の墓石群も同じように移転してきている。その大道寺家の墓地内に幽学の墓はある。

銘を刻んだ棹石部分は、高さ約一二〇cm、幅と奥行きは共に約三九cm



図7 名古屋市平和公園内の大原幽学墓石

で頂上は丸みを帯びている。棹石の乗る台石の前には、花立ての筒が二段目の台石に乗る形で立ち、その間に線香立てが置かれている。また最下段の薄い敷石の前にも花立てと線香立てが地面に埋まって立っている。戦災に遭ったために写真のように墓石全体にひび割れが多く、欠損している箇所もある。銘は棹石正面に「大原幽學先生墓」とあるだけで、左右の側面や裏面にも文字はなく、建立年や施主名もない墓石である。石材は最下段の敷石とその前の花立て以外は全て同じで、オレンジ色がかった花崗岩である。この石材は大道寺家も含め周辺の墓石と同じで、形も周辺の同時期のものと似ている。このことから幽学の墓石については、門人達がとくに石材や形態にこだわった様子はなく、この地域で一般に用いられている墓石と同じ様式で建てられたといえる。

(2) 小寺玉晃の記載

明治から大正期にかけて編纂された『名古屋市史資料』は、名古屋市史編纂に際して名古屋に関する史料を全国的に収集、筆写した資料集で

ある。それらは疎開していたため空襲を免れて、現在は鶴舞中央図書館に保管されているが、その中の『小寺玉晃見聞筆録 巻一』⁽²⁴⁾に、幽学の手がかりを求めて明治七年五月に性学門人の石毛源五郎と鈴木英三が、小寺玉晃のもとを訪ねている記録がある。

石毛と鈴木のほか名前の記されていない一人を含めた三人は、五月十五日から玉晃の記事に時折に登場するが記事が断片的なため、これらの記載からは来訪の目的などは分からない。蓬左文庫に所蔵されている小寺玉晃の『甲戌雑々録』には、もう少し詳しい記載が見え、この記録から幽学の身元を尋ねてきた門人たちの動向を窺うことができる。ただこの記録は紙背文書があつて非常に読みにくい史料であり、全文の解読が困難だったので文意をまとめる。

明治七年六月に下総国香取郡長部村より、万松寺へ幽学先生の碑を建てに來た者たちがある。彼等が言うには幽学先生は前名を大道寺実生といい、幼名は才次郎で大道寺玄蕃直方の子であるという。そして京都や信州、下総へと行き多くの人を教えて歩いたが、安政五年三月八日に六二才で病死した。⁽²⁵⁾ 今年はそれから十七年になるので、幽学先生について知っていることがあれば教えてほしいと訪ねてきた。

という内容であるが、門人等が小寺玉晃を訪ねたのは、玉晃が名古屋城下の情報を豊富に持っていたからというだけでなく、小寺家がかつては大道寺家の家臣だったこともあったのだろう。しかし結局のところ玉晃は「大道寺直方之嫡子ニ不非事」として、大道寺家には幽学に該当する人物はいないことを彼等に伝えている。それにしても刑まで受けた幽学の墓を大道寺家の墓地に建てるのが許され、また十七回忌法要まで行うことができたのは普通のことではない。この経緯については木村礎氏も「大原幽学の出自について」で指摘しているように玉晃の取計らいがあつたことが想像される。⁽²⁶⁾

いずれにしても墓石建立に玉晃が関与していることは確かであり、結

果として門人たちは万松寺へ墓石と十七回忌の卒塔婆二本を建てることのできたのである。

次は「此節出来」として『甲戌雑々録』明治七年六月の頁に玉晃が描いた幽学の墓石である(図8)。

現状とほぼ同じであるが、玉晃の図には線香立てと地面に立つ花立てがないなど、現状と相違する点も散見できる。また当時はこのように柵で囲ってあつたのであろう。玉晃は棹石の頂上が盛り上がっているのが印象的だったのであろうか、現状は丸みを帯びているが描かれている墓石の頂上は極端に尖っている。また花崗岩製であるので墓石全体に黒点をまぶすなど、玉晃も石材の表現を工夫している。

こうした名古屋での墓石建立に関して香取の性学教団の側にも入用記録が残されている。この史料は表紙に『尾張国愛知郡名護屋万松寺へ大先生之御石碑建立之諸記 明治七庚戌年六月廿八日改』⁽²⁷⁾とあり、そこに記載されている墓石建立の諸経費をまとめたのが表3である。

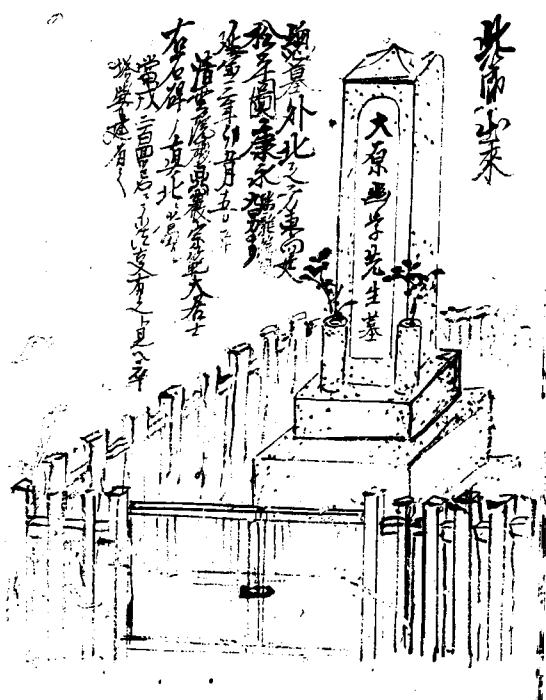


図8 小寺玉晃『甲戌雑々録』より (蓬左文庫蔵)

表3 明治7年 大原幽学墓石建立の経費

月日	金額	内 訳 (備考)
6.19	25 両	御影石 3 ッ代、大阪表石源へ渡ス
20	14 両 3 分	大阪石切出し場より名古屋迄之運賃、河岸場車力代共
26	12 両 2 分	御石碑棹名細工料
	10 匁	
26	5 両	同 上台細工料
26	8 両 1 分	同 中台細工料
	5 匁	
26	5 両 2 分	正面文字彫手間分
	10 匁	
26	8 両	芝付、石四ッ組代 手間並車力代共
26	3 両 2 分	巻上ケ建方入用
	1 分	
26	1 両	右建方ニ付石工 3 人差入分手間
26	2 両 2 分	石花筒 2 本代
26	1 両 3 分	右細工場に家組諸式手間分
	1 貫250文	
6.10	3 両	石工 6 人へ酒代遣ス
10	10 両	御墓所 1 丈 4 尺四方、地代万松寺へ納
10	1 両 1 分	万松寺方丈へ御石碑文字御認之礼上ル
6.26	2 両 2 分	御石碑出来上り之節石工へ祝儀並酒代共遣ス
26	3 両 3 分	御囲諸式杉丸太並御墓所後之根代植木代共メ
	7 貫735文	
26	1 貫725文	開元ニ付墨筆御備物御水茶碗分
26	2 分	大方丈始へ開元之御布施
合計	金 109 両 銀 25 匁 銭 10 貫 710 文 金ニ上ケ合 110 両 1 分ト 2 貫 370 文也	

25両 山崎衡様より助成分右相加ル
50両 長部 諸徳寺 足川 岡飯田 阿玉 米之井 飯倉 右村道
友より被差出候分相加ル

名古屋万松寺に立つ大原幽学の墓石は、それまで千葉県内務部『大原幽学』が明治八、九年頃、高倉テル『大原幽学』が明治四年を建立年としていたが、水谷氏はそれらを否定し、玉晃の記録から明治七年五月と判断された。これは名古屋市史資料『小寺玉晃見聞筆録』に五月十五日から石毛源五郎や鈴木英三が玉晃を訪ねており、また彼等が六月十日には別れの挨拶に寄っていることなどから推測したものである。この史料集の六月十日には次のように記されている。

十日（前略）万松寺江両三人在所へ明十一日発足
暇乞（後略）

このように月が記されていない十日の記事であり、また在所へ発つことはすでに墓石が完成したので帰るのだろうと考えたわけである。そのため玉晃の『甲戌雑々録』にある明治七年の同月廿六日という書き出しで始まる性学関係者が帰国する記事についても、同月を五月と想定しそれは墓石が完成したために帰国したと解釈したのである。さらに幽学の祥月命日である旧暦三月八日が新暦では四月二十三日にあたるとし、その日を期しての墓石建立と考えれば、いっそう五月説を妥当に感じたのである。

しかし先の『大先生之御石碑建立之諸記』には六月二十六日に石工らによって建てられ、開元（眼）とあるので、六月の建立は間違いない。

また、玉晃の『甲戌雑々録』には六月二十七日に和宮が熱田駅に止宿した記事があるが、記載順としてはその直前に「此節出来」という墓石の図が描かれ、和宮の記事の次に、六月に下総国香取郡長部村八石の者たちが幽学先生の碑を立てにきた一件として記しているの、記帳の順からいっても「此節出来」の同月廿六日は六月の記事に間違いない。

記載内容で気になるのは二つの台石と棹石の計三つの石材は、大阪方面の御影石（花崗岩）が使われていることと、石材を名古屋へ運んでからの作業ということである。また玉晃の図には見えなかったが墓石の後ろには植栽もされていたことが分かる。それらの諸経費が合わせて金一一〇両余りだというのである。

ところでこの史料は後で纏めなおしたものであり、記載順は日付どおりではないが、幽学の墓石の完成は明治七年六月二十六日ということになる。ここで問題となるのは小寺玉晃の史料から、幽学の墓石建立年月を明治七年五月と断定された水谷氏との相違である。以下、この点を考えてみよう。

つまり、六月十日に石毛源五郎と鈴木英三が在所へ帰るとあるのは、『大先生之御石碑建立之諸記』にあるように、万松寺へ地代などを払ってから下総へ帰ったというわけではなく、墓石が完成したので大阪方面の石材関係者のもとへ出かけていったと考えられるのである。その後、開眼にあわせて戻ってきたのか、又は彼らは帰国し違う門人が再び来たのかわからないが、石毛と鈴木の出立の挨拶を墓石完成後の帰国と解釈したところが、水谷氏が建立月を一ヶ月誤った要因といえる。

以上、小寺玉晃の二種類の記録と門人間に伝わった墓石建立の記録から、名古屋の幽学の墓石建立の経緯を見てきたが、以下、それらを含め名古屋での門人達の動きを簡単にまとめておきたい。

まず門人たちは師匠である幽学の十七回忌に際して、幽学の大道寺家出身という伝承を確認するため名古屋周辺で情報の収集をしている。そして大道寺家とも関わりのある小寺玉晃を訪ねるが、幽学の出自については否定される。しかし大道寺家の墓地に墓石を建立させてもらうことは許され、そして六月には墓石が完成するのである。

ただ注目すべきは前年近江国石部にて遠藤良左衛門の墓石と、形が全く違っていることである。遠藤の墓石は周囲を石垣で囲むなど墓地全体の雰囲気や墓石の形態も、その地の伝統的な墓石とは全く異なる周囲から独立した墓だったが、名古屋に建てた幽学の墓は周囲の墓石と石材や形までも合わせたものとなっている。両墓石とも建立の施主は同じである。しかしこのような相違が生まれた背景としては、名古屋の場合には大道寺家の墓地に建てさせてもらう以上、同家の墓制に合う墓である必要があったからだろうと思われる。それに比べて石部に立つ遠藤の墓石の場合は、建立の前に性学の教えが地域内で知られており、その教主の墓であるので在地習俗とは隔絶した宗教的な墓地空間を開設することが可能だったといえよう。

③長部村の墓地 (No 1)

(1) 長部村の住居移転と墓地

香取郡長部村は大原幽学の指導する性学仕法を村全体で受け入れた村で、後に二代目の教主となるこの村の名主遠藤良左衛門を筆頭に、村として幽学の改革的指導を受け入れていった。長部における幽学の指導については膨大な研究が蓄積されており、農業技術だけではなく習俗の面でも幽学の考えが浸透していった様子は、冒頭で触れたように村の習俗を幽学なりに改変させただけで、性学の活動として村の年中行事の中に新たに位置づけていくものであった。

長部村で実施された性学仕法のうち非常に大きな事業として、耕作地近くへの住居の移転がある。これは幽学の指導により天保十三年頃に実施されたといわれ、それまで村のほぼ中央の高台に祀られた日野神社の周辺に集まっていた住居を、二軒を一組として耕作地の近い場所へ居住地を移したというものである。この仕法については幽学の指導した合理的改革の代表的なものとして、先祖株組合や耕地整理などと共によく取り上げられるが、史料の根拠はというと非常に弱い点もありこれまでも疑問が示されてきている⁽²⁸⁾。

こうした基礎的な部分を見直すような丹念な研究も進められ、耕地の移動・集積を検討した門前博之氏は、長部村の集落移転は幽学の指導以前から徐々に住居の拡散が進んでいたことを指摘している⁽²⁹⁾。このことは、後述するように日野神社の奥にあった共同墓地が、幽学の指導によって近世のある時期に男女別の二箇所⁽³⁰⁾の墓地へと移動したとする説も、史料的な根拠はやはり見出せない⁽³¹⁾ので、無検討のまま幽学に結びつけるのは危険なことを示唆している。

住居と墓地の移転が幽学の指導とどのようにかかわっていたのかとい

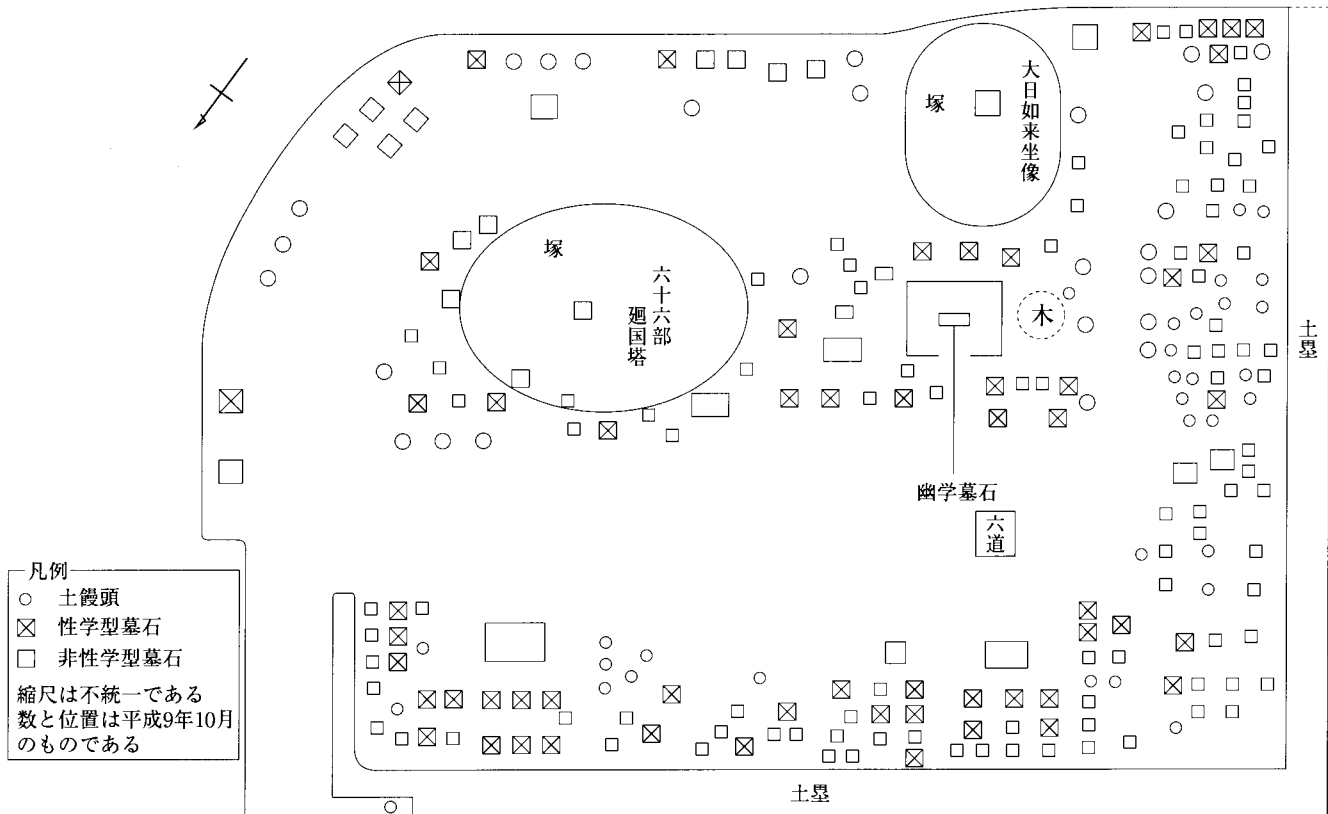


図9 長部男墓見取図

うのは、非常に大きな問題であるがそれが深く掘り下げられてこなかったのは、性学墓をめぐる開設の経緯や習俗などがこれまでの幽学研究から外れてきたことによる。そうかといってこの問題を現段階で明らかにするほどの準備を筆者は持ちえていないが、課題を検討するための基礎作業として、ここでは長部地区に残る性学門人の共同墓地の現状および墓地改変にかかわる史料を紹介し、若干の考察を加えてみたい。

ところで、現在の長部地区には寺院はなく、隣の清和甲（諸徳寺）地区の天台宗永命寺が葬儀及び墓地の管理を行っている。そして共同墓地は男を埋葬する墓地と、女を埋葬する墓地に分かれており、ともに男塚、女塚もしくは男墓、女墓と呼ばれている。まず両墓地の現状を概観しておく。

(2) 男墓

男墓は女墓とは小高い丘を隔てた台地上の奥まった場所に開かれている。中央の広場を囲むように性学特有の頂上が尖った墓石が、どれも内側に正面を向けて立ち並んでおり、その配置は家ごとにまとまっている。墓地内には塚状の小山が二つあり、南側の塚には大日如来坐像が、東側の塚には六十六部廻国塔が立っている。

性学型の墓石のほかに、この地方ではよく見る一般的な形の墓石もかなり混じっており、それらには時代的に幽学が長部へ入る以前の年号を持つものも多い。また各墓石の正面に刻まれた戒名は九割以上が男だけを刻んでおり、この地方でよく見られる連名の墓石も、男性を示す居士号の戒名が並んでいる。天明二年の連名墓石が唯一夫婦と思われる墓であった。

また、この墓地内には塚上の供養塔のほかにも同様な六十六

部の廻国供養等が数基個人の家に集まっている。つまりこの墓地は男だけの墓地として意識され使用されていた可能性が高く、六部行者など男の信仰儀礼に関するものもここに集まっているといえよう。

幽学は安政五年三月八日の未明に、この墓地の中央部にある遠藤家の墓地で自刃した。当初その場所には墓石ではなく櫛が墓標として植えられたといわれ、大正十一年になって現在の「大原幽学翁之墓」と刻んだ板状の墓石が建てられている。ここで疑問となるのは、なぜ幽学の墓に、性学集団があればどこまでこだわった特徴的な墓石を用いなかったのかということである。また遺体を何処へどのように埋葬し、どのような葬儀を行ったのかという点もわかっていない。こういった疑問に答えてくれるような幽学の葬儀に関する記録は、残念ながら全くといってよいほど伝わっておらず、逆に不自然なくらいである。

このような性学教主の墓が性学墓でないということは、性学集団の墓へのこだわりは幽学の時代というよりも、むしろそれ以降の、遠藤や石毛の時代になってからのものと考ええることも可能となってくる。そしてこれが性学墓と幽学とを簡単に結びつけられない理由の一つともなっているのであるが、それについては弘化三年の墓所一件の関係で後述したい。

(3) 女墓

次に女墓を見てみよう。場所は日野神社の西側の奥に開かれている。横長に広がった墓地全体を低い土塁が囲んでおり、さらにその内部も何本かの土塁で仕切られている。そしてその奥には「子安様」と呼ばれる観音堂が祀られており、いまなお子安講などの女性を主とした信仰が生きている。観音堂の周りには東下総地方では近世前期の墓標として多く見られる砂岩製の霊廟型の墓標や、元禄期ごろからの安山岩製の舟型の墓標が乱立している。それらに刻まれた戒名を見ると禪定門や信士など

の男性の号や、夫婦らしき男女連名の戒名を刻んだ墓石がある。しかし新しい墓石は無く、現在は墓地として活用されてはいない。つまり長部のかつての共同墓地はこの観音堂の周辺にあり、そこは男女の別なく使用されていたと考えられる。それがいつの時代か現在の二箇所へ移り、その際に男女別という形態が生まれたと想像することができよう。

この共同墓地と低い土塁を隔てて隣接するのが女墓である。新しい墓石は家の墓として「○○家之墓」という角柱の石を立て、そこへ火葬した骨壺を安置する方法になっているが、昭和六十年頃までは土葬が一般的で、建てる墓標も一人一基が基本となっていた。立てる墓石の棹石も角柱の頂上が尖ったいわゆる兜巾型が多く、その大きさはどれもがほぼ同じで台石も三段重ねの性学の墓石である。

全墓石の調査までには至っていないが、筆者が調査した範囲では、女墓ではこうした性学の特徴的な墓石も、時期によって形態上で若干の違いが見られる。先ほどの兜巾型の墓は明治二十年代から見られるようになり、それ以降、昭和に建てられたものもこの形を踏襲している。しかし似たような棹石をのせながら、頂上を尖らせず皿を被せたような形もそれ以前には多く見られ、下の台石二段の上に蓮華をレリーフした受け台を配した兜巾型のものが、弘化や嘉永、安政など幕末期のものにみられる。つまり形からは男墓ほど性学墓特有の画一的な墓石ばかりとはいえず、むしろ明治二十年代になって規格性のある墓石に統一されてきた傾向が窺える。

墓石の銘文は正面に女性だけの戒名が刻まれ、多くはその左側面に施主の名が刻まれている。施主名は男性の名前ばかりであるが、これは世帯主というか屋号であり墓石は家が建てるものという意識なのであろう。

以上、長部の男女の墓地を見てきたが、簡単に整理しておこう。まず墓石の形という点では性学の規格性のある性学墓にまわっているのは男墓であり、女墓の方がデザインとしては豊富な種類が見られたが、明治二十年ごろから規格性のある性学墓石が増えていく。これは性学墓の

規格性が浸透してきたのがこの時期ということなのだろう。

墓地としては女墓に隣接する観音堂付近が、男女別に墓地が分離する以前の共同墓地であったといえ、そこでは男女を分けることなくこの地方の一般的な墓石が建立されていた。それがいつ頃、現在のようになつたのかは分らないが、幽学が自刃する以前に男墓が成立していたことは確かである。

(4) 弘化三年の墓所一件

大原幽学記念館に所蔵されている八石性理学会旧蔵文書のなかに、長部の墓地に関する史料がある。これは溝原村の東栄寺住職良範と長部村の百姓治兵衛との間で争論となっていた墓地拡張に関する文書で、万力村の鎗木太右衛門が仲介人となり処理している。当時の長部の墓地状況をうかがう事ができる有益な史料であるので、次に全文を掲げておく。

弘化三年八月十二日

万力村太右衛門殿より御役所江差上候東栄寺より長戸村江相懸り候墓所一件之写(以上表紙)

美濃紙帳面ニ認メ

乍恐以書付奉申上候

下総国香取郡溝原村東栄寺良範より私組合同郡長部村百姓治兵衛江相懸墓所一件、其御筋江申立、当御役所江御沙汰相成、右治兵衛并村役人共御呼出御札之上、私江事実糾方被仰付、双方江得与始末相尋、私取扱を以熟談仕候趣左ニ申上候

一東栄寺良範申立候者、長部村ニ而古来有来候墓所之外新地取広ケ、刹菩提寺江無沙汰ニ古墓所より石碑新地江引移、且右村方ニ有之候同寺末寺成就院境内掠取旁ふ法之いたし方ニ付、難捨置其御筋江申立候儀之旨申之

一長部村治兵衛并村役人共申立候者、有来候墓所手狭ニ付、新葬之

度々古骨等掘出し、先祖江対シ不孝之儀与相心得、同所統有来墓所之内、荒地ニ相成居り候場所江此後葬度村内一同相談之上、墓地ニ普請いたし候儀ニ付、敢而菩提寺故障等有之間敷儀与相心得、且成就院境内切広掠取候儀者一切無御座候、尤村方作場道追々道狭り、人馬往来差支難渋ニ付同院境内之協作場道取広ケ候儀之旨申也

右之通双方申之立入得与承り候処、行違之儀も有之候ニ付、双方申懸憤合之儀者私共貫請、尤此度取立候場所江引移シ候石碑者取形之通為引直、以来新葬有之節者右取立候場所江葬候共、菩提寺ニおいて聊故障無之、葬式執行可申答ニ而双方無申分熟談行届、右一件重而双方より御願筋無之旨申聞候ニ付、御札方は迄ニ而御下ケ被成下候様仕度、此段於私共奉願候以上

弘化三年八月

万力村 鎗木太右衛門

同 儀左衛門

清水御領

御役所

まずこの文書から東栄寺良範側の申し分を見てみよう。それによれば長部村では古来よりの墓地があるにもかかわらず別に新たな場所へ墓地を広げ、そこへ石碑を移しておきながら菩提寺に届けも出さずにおり、さらに村方にある東栄寺末寺にあたる成就院の境内を、掠め取るという不法を行っていたというのである。

治兵衛側の申し立てで注目すべきは村役人も一緒になっていることであり、この行為が村全体の考えで行われたことがわかる。その理由としては、これまでの墓地は手狭で新仏を埋葬するにしてもその都度古い骨が出てきてしまい、それは先祖へ対して不孝な行いであるので、隣接する荒地を村内一同で普請したまでのことであり、あえて東栄寺へは断りもしなかったというのである。先祖のためを思つて荒地を開墾しただけ

なので、菩提寺とは無関係であるという主張である。成就院境内についても掠め取ったのではなく、すぐ脇を通る作場道が狭くなってきたので人馬が往来できるように取広げたと主張している。石碑を移したのは事実なのだろうが、その理由については触れられていない。

扱いた人として万力村の二人が間に入って熟談した結果、「此度取立候場所」については、移した石碑を元通りに戻すこととするが、新仏が出たときはそこへ埋葬することが了承され、また葬儀については前のように菩提寺で行うことが確認されている⁽³²⁾。

以上のような内容をもとに、長部村における当時の墓地の状況を整理してみよう。

まず文中で問題となっている成就院というのは、現在の女墓の奥にある古い墓石が並ぶ観音堂を指しているわけだが、良範の申し立てによれば成就院とは別な場所に古来よりの墓所があって、そこへ無断で石碑を移動したと読むことが出来る。そして治兵衛の申し立てに古来からの墓地は狭くて掘る度に骨が出てくるとあるので、そこは遺体を埋葬している墓だということがわかる。そして問題となっているのは成就院に立つ石碑を、古来からの墓地へ移動したということである。

これだけでは現在の男女別の墓地との関連を見ることは難しいが、ここで周辺の墓制に目を向け、香取郡・海上郡周辺が両墓制の散在する地域であることに注目したい。⁽³³⁾

長部から2kmほど離れた香取郡山田町府馬地区は、三代目教主となった石毛源五郎が出た性学の盛んな地区であり、明治十九年に開削されたこの性学墓を以前紹介したことがある。⁽³⁴⁾そこでは伝統的な墓制として、遺体の埋葬地と供養の墓標を建てる石塔場を使い分けるいわゆる両墓制が行われていたが、性学門人たちは行政が推進する近代制衛生観念に乗ずる形で、両墓制の不衛生と不孝を理由にそれらの習俗を否定し、教団だけの性学墓を新設することに成功している。こうしたことを踏まえる

と、弘化三年当時の長部村も墓地を複数持つ両墓制を行っていた可能性も高くなってくる。長部でも古来からの墓地には墓石がなく、成就院には墓石があったことを考えれば、ここの墓制が両墓制だったというのは、あながち無理な想定ではないだろう。問題なのは古来からの墓地がどこだったのかということである。

現在女墓となっている場所が古来からの墓地に該当するとも考えられるが、成就院境内の脇を広げたという証言を考慮すると、女墓はむしろ新たに広げられた場所にあたると考えたほうが妥当である。そうすると古来からの墓地というのは、成就院から一山はなれた現在の男墓と考えたほうが適当であろう。

つまり、長部においては石塔を立てない埋葬地が現在の男墓の地に元々あり、成就院は石碑を建てる石塔場として機能していたのであろう。そして弘化三年以前に埋葬地を拡張し、墓石を成就院から移動して新たな墓地が成立し、また成就院に隣接した場所にも境内を拡張して（掠め取った）新たな墓地が造成されたということになる。ただ二つの墓地が男女別なのかどうかはこの史料からは読み取れないが、現在女墓に立つ墓標の約半数にあたる四九基を調べると、天保期から現在までの墓標四八基の被葬者が全て女性であるので、弘化の墓所一件から以降は二つの墓地が男女別に使用されてきたことは間違いない。⁽³⁵⁾

ところで弘化三年頃の幽学は、長部村での住居移転といった大事業を終え、四年後には鐺木村宿内での集落の開拓および男女別墓地の開設というように、この地方での村運営に大きく関わっていた時期である。しかし先の史料は治兵衛の名が見えるものの、あくまでも村と寺との争論であり、文中に幽学の姿を見ることはできない。しかし開設の理由となった遺骨の掘り返しが先祖への不孝であるということや、墓地を男女別にするということは、その背景に儒教色の濃い幽学の指導が大きく影響していることは間違いない。墓地改革はあくまでも村としての行動で

あったが、それは幽学の助言のもとに実行されたといえる。そしてこれまで墓地を管理してきた永命寺とすれば、両墓制であった伝統習俗を無断で改変されることは、村と寺院との間にあった秩序を無断で破られる行為だったので争論となったわけである。

なお、この墓所一件は先に見た嘉永五年六月の関東取締出役による鍋木村平山忠兵衛の尋問でも取り上げられている。次にその関係箇所を抜き出してみよう。⁽³⁶⁾

(中略)

中「性学に成と墓所を直すそふだ」

(平)「左様の儀ハ御座りませんが、墓所のせまきハ広げましたも御座りませふ」

関「先年何村で有たか墓所を直して菩提寺より咎められ騒動いたした事があらふ」

(平)「ハイ成程先年墓場を広げ、菩提所より彼是と申され混雑致しました事が御座りました」

関「金をやってすましたるふ」

(平)「夫ハどふ御座りますか存ません」

(後略)

関東取締出役の側では、この墓所一件の情報を得ており、金で処理をしたのだろうという問いは、この頃の出役が幽学を裁判の舞台へ上げるための材料探しであるが、性学が在地習俗とは異なる墓制を行っていたことは対外的には意外と知られていたことなのかもしれない。

おわりに

最後にまとめとして、これまで述べてきた事例を簡単に整理し、今後の展望についてふれておきたい。

幽学の生前に形成された墓地としては、鍋木村宿内の共同墓地と長部村の男女別墓地があるが、共通するのは男女別の墓石を立てるということと、墓地の周囲をなだらかな土塁で囲むということである。長部は地理的にも離れた場所に男と女を分けるが、宿内は同じ墓地内を男女が向き合う形で分けて使用している。また、男女を分けるにあたっては、長部では弘化三年の墓所一件にも見えるように、新たな場所に墓地の普請まで行っている。つまり男女を別にするにこの時代の門人達のねらいがあったことは確かであり、そこに幽学の指導・助言があったことはまちがいない。

幽学没後に開かれた例を見ると、名古屋万松寺の幽学の墓や石部の善隆寺といった後年移動した特別な事例を除けば、丸山、箱根、府馬といずれも墓地を高い土塁で囲み、使用する墓石は頂上が尖った規格性のある墓石を用いるようになる。石部の丸山や箱根の墓地などは未使用に近い状態だったので墓石数が少ないが、おそらく男女別に使用する意識があったと思われる。

つまり、幽学の指導した墓地というのは、埋葬地が男女別にわかれており、さらに土塁によって在地とは明確に区分された特別な空間を目標にしていたといえる。それが二代目、三代目の教主へと受け継がれたが、墓石も統一された規格や材質となり、土塁も二mを越す堅牢なものを築くなど、より一層、墓へのこだわりという面が強調されていったのである。またこういった性学墓の相違を考えるうえで、性学の受容母体が共同体のなかでどのような立場にあるのかという点も、墓地を改変する上で重要な意味を持つてくるといえる。それは長部や宿内のように地域全体が性学仕法によつて墓地を改変するのであれば、墓地改変も可能な仕法であろうが、明治期の府馬における性学門人の墓地独立運動などは、村内でも一部の人だけの行動ゆえに、村内で性学を貫こうとするには独立せざるを得ないわけである。

対照的であるが性学門人が宗教団体化し、性学の実践内容が精神修行的なものへと変化して行く傾向と、性学墓の推移は大きく関連すると思われる、今後はこうした幽学没後の性学教団の動向を併せて考える必要がある。以上で性学門人と墓に関する小論を終えるが、これまで取り上げられてこなかった性学墓を、幽学研究の舞台へ出すことを第一の目的としたこともあって、十分な考察を加えないまま事例の紹介に終始してしまつた。今後は上記のような教団の動向と墓との関連、被葬者を主とした性学と家意識の問題、さらには性学における先祖観念などについて再考して行きたいと考えている。

付記

性学墓の調査に際し、亀井龍寿氏、石毛富英氏、石毛せつ氏、志賀重平氏、服部絢夫氏、小向寅市氏、来栖良平氏、鈴木昇氏、鈴木静二氏、大原幽学記念館、三島市郷土資料館の皆様には、資料閲覧や聞き取り調査などで大変お世話になりました。末筆ながら記して謝意を表します。

註

- (1) 『旭市史』第三卷(昭和五十年)の大原幽学関係資料の解説で川名登氏は入門暫約書である神文の分析から門人層の変化を紹介している。
- (2) 中井信彦『大原幽学』(昭和三十八年、吉川弘文館)や木村礎編『大原幽学とその周辺』(昭和五十六年、八木書店)などが代表的であるが、木村礎「研究史の概観」(同書所収)は膨大な研究史を世相の変化と関連させて整理している。
- (3) 高橋敏「近世後期刊落社会組織と家族・子供・若者」(『コスモロジーの近世』平成十三年、岩波書店)
- (4) 木村礎「性学仕法の基礎的考察」(『駿台史学』四一、昭和五十二年)、同「性学の仕法」(同編『大原幽学とその周辺』昭和五十六年、八木書店)
- (5) 拙稿「明治期千葉県における墓地の開設」(『町と村調査研究』創刊号、平成十年、千葉県立房総のむら)
- (6) 飯田伝一『大原幽学の事蹟』(昭和九年、東興社)
- (7) 千葉県教育会『大原幽学全集』(昭和十八年)

- (8) 越川春樹『大原幽学研究』(昭和三十二年)
- (9) 香取郡とともに主要な門人がいた下総国殖生郡荒海村は、成田周辺の拠点となる教導所であったが、現段階では性学墓を確認できなかった。ここには主要な門人もおり性学施設も建設された地域であるが、性学墓が普及しなかった例として注目したい。また房総と同じような活動を展開した信州上田地方については未確認である。

- (10) 拙稿「性学墓について(1)」、「(2)」(『民具マンスリー』三十一・十一、十二平成十年 神奈川大学日本常民文化研究所)
- 拙稿「明治期千葉県における墓地の開設」(『町と村調査研究』創刊号、平成十年、千葉県立房総のむら)
- (11) 香取郡千潟町錦木 平山高書家文書(大原幽学記念館所蔵の写真版を利用した)
- (12) 『新修石部町史 通史編』(平成元年)では明治初期に活発となった村側の風俗矯正の動きと、性学の教えが合致したという視点で近江での性学の広まりを紹介している。また石部宿旧本陣の小島家を通じて、下総門人たちが石部地域と関わりを持っていることが明治七年の同家の日記(『新修石部町史 史料編』平成二年)に散見できる。
- (13) 奥村末吉『石部郷土史』(明治四十年、私家版)なお、この文献については石部町教育委員会の山元義清氏からご教示いただいた。
- (14) 木村礎編『大原幽学とその周辺』(昭和五十六年、八木書店)所収。
- (15) 寅市氏もそうであるがこの地方の性学は、実質的には石毛源五郎によって形成されたものとして意識されている。
- (16) 小向寅市氏によれば、この周辺の墓はみんな在地の石材である花崗岩を使っており、遠藤良左右衛門の墓石も東寺の山から切り出した石材であるという。
- (17) 木村礎編『大原幽学とその周辺』(昭和五十六年、八木書店)所収。
- (18) 寅市氏は善隆寺にある遠藤の墓守二人の墓石は、かつて八石教会の近くにあったものをここへ移動したと聞いているが、元の場所不明であるという。
- (19) 三島市教育委員会「接待茶屋遺跡」(平成八年)、三島市郷土館「発掘された箱根旧街道」(平成八年、企画展示図録)
- (20) 鈴木とき『大原幽学 遠藤亮規と山中新田接待茶屋』(昭和五十一年)
- (21) 小さい釜は深さ約四九cm、直径約五五cmで蓋付き。大きい釜は深さ約六二cm、直径七七cmで蓋なし。小さい釜に陽鑄されている銘は次のとおりである。
下総国香取郡長部村八石性理教会所
廣為追友鑄此器永充施行平憩所之用
明治十二己卯年七月(花押)
鑄工 東京深川 田中七右衛門

古文書類は箱に入っており、各文書には「1号」などと番号が墨で付され「鈴木」の印鑑が押されている。これはある時に鈴木氏が文書を整理した際に付したものである。

(22) 明治十二年十月二十八日「箱根施行平休息所開場規式之記」(鈴木静二家文書)。この文書は八石教会が接待茶屋を運営する趣旨などが関係者の名とともに見えるので、次に全文を掲げておく。

「明治十二年十月廿八日 箱根施行平休息所開場規式之記 1号」(表紙)

箱根施行平休息所開場規式留

去ル明治六癸酉年七月十三日御発途ニ而 尊父江州石部駅江御登リ之節、同廿一日当所江御一泊ニ相成、云ニ御送跡ニ依リ今般休息所を取建、国ニ往来之道友并ニ旅人之勞を助度旨ニ而、駿河国有渡郡八幡村井上幾太郎、相模国足柄下郡成田村夏目麟兵衛、同村山品次郎々八石江願之上取建ニ相成候、然ル上者出勤之者ハ猶更万端一箇之了簡聊不用、別而奢ケ間敷儀一切無之、誠意之一ツを以て勤尽し、道友互ニ永統而巳を心懸曰ニ無怠慢可致丹精筭、附而者百姓之平食者米麦粟三品之飯ニ定る者ニ有之条、兼而承知之処今日開場規式為立会

下総国香取郡長部村	遠藤新太郎
同 海上郡足川村	飯島八十八
同 香取郡府馬村	志賀元蔵
同 同	神谷慶之助
同 溝原村	鈴木英三
同 夏目村	掛果市郎右衛門
下総国香取郡鐺木村	林 嘉十郎
同 川島村	並木七之助
同 多古村	志波兵左衛門
同 仁良村	重井勘兵衛
同 匝瑳郡平木村	増田忠次郎
同 海上郡松ヶ谷村山崎甚五右衛門	
同 香取郡水戸村	平山庄右衛門
同 匝瑳郡井戸野村遠藤平右衛門	
同 下総国匝瑳郡堀川村	加瀬清左衛門
同 海上郡成田村	飯田佐次兵衛
長門国阿武郡宇生賀村中野由輔	
近江国甲賀郡石部村青木ケ峯詰二瓶慎則	

遠江国敷知郡浜松住 渡辺章
武蔵国北豊嶋郡東京下谷竹町住為信男 佐藤巳作
右発起人 井上幾太郎

夏目麟兵衛死去ニ付代実兄 柏沼弥五兵衛
村山品次郎

山中村戸長 藤沼忠兵衛

村用掛 浜野友五郎

同村世話人宿 広野助左衛門

地持惣代 津田伊三郎

川井半四郎

勝手働

三河国額田郡元宿村 手嶋利喜作

当所 栗田治兵衛

右人相招約束之通り三ヶ村道友互ニ一ツ家与心得る為め、長部村之倣先例ニ鰯一疋不用、其土地有合せ之品ニ而買物一切不致事故、則手作リ里芋牛房大根限リ平ニして汁之実者、葉ばかりにて牡丹餅を振舞
右者立会人終迄以後猶々供ニ可守護定取極相成ニ付書之

明治十二年己卯年十月二十八日 石毛源五郎(花押)

(23) 水谷盛光「大原幽学出自考」(『日本歴史』三三二、昭和五十年)、同氏「大原幽学出自考説(抄)」(『郷土文化』二九一三、昭和五十年)など。

(24) 「小寺玉晃見聞筆録」という書名は名古屋市史資料編纂の過程で付されられたものである。この資料集には巻末に資料採集の日時・原資料所蔵者・筆者名などが朱書きされているのが通例であるが、この本については大正二年に「右小寺玉晃日記之一冊」より写したことは記載があるものの、書名のみで原資料の所蔵先は記されていない。追いかけたところ早稲田大学図書館の『玉晃叢書』中の「玉晃日記」のうち一冊(No.一一五)が明治七年分で、市史資料「小寺玉晃見聞筆録」の出典元であることが確認できた。表紙題箋は後年の表装で「玉晃日記」とあるものの、中の元表紙の題名は単に「明治七甲戌」となっている。この日記が早稲田大学図書館に入った経緯は、水谷不倒氏が名古屋の豊田書店より購入して所持していたものを、明治四十二年に大学が購入したものである。そのさいに表紙は大学で新しくしたものであり、玉晃日記という題箋名もその時に付している。題箋と本文では筆跡が全く異なる。つまり名古屋市史編纂の係りが大正二年時に写したときは題箋名は玉晃日記だったのでその点は合致する。

(25) 大道寺との関連を考え、門人たちも幽学は自刃ではなく病死だと説明したも

のと思われる。水谷氏も指摘しているが、同氏はさらに玉晃は幽学のことを知らなかったのだらうと推測している。

- (26) 木村礎編『大原幽学とその周辺』(昭和五十六年、八木書店) 所収。
- (27) 大原幽学記念館所蔵『大原幽学関係資料』IV P-十四
- (28) 木村礎「性学仕法の基礎的考察」(『駿台史学』四一、昭和五十二年)、同氏「性学の仕法」(同氏編『大原幽学とその周辺』昭和五十六年、八木書店)
- (29) 門前博之「長部村についての一考察」(『歴史論』八、昭和六十二年)
- (30) 男女二箇所にある墓地の墓石悉皆調査を実施すれば、形態の変遷などから性学墓の誕生経緯などが分かるであらうと予想しているが、全墓石までは調査が及んでおらず後日を期したい。
- (31) 大原幽学記念館所蔵『大原幽学関係資料』Ⅷ B-八
- (32) 現在の男墓には弘化三年以前の墓石も立っており、この和解内容がどのように実行されたのかは分からない。内洛の後に石塔が速やかに戻され、また近代以降に再び動かされた可能性もあるが詳細は不明である。
- (33) 小川直之「両墓制と男女別墓制」(『千葉県の歴史 別編 民俗Ⅰ』平成十一年、千葉県立房総のむら)
- (34) 拙稿「明治期千葉県における墓地の開設」(『町と村調査研究』創刊号、平成十年、千葉県立房総のむら)
- (35) 平成九年の筆者調査によるが、墓石の悉皆調査にまで至っていないので全体的傾向は未確認である。なおこの調査は大原幽学記念館鈴木映里子氏の助力によるものである。
- (36) 香取郡千渴町鋪木 平山高書家文書(大原幽学記念館所蔵の写真版を利用した)

(伊能忠敬記念館、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(二〇〇三年五月二十三日受理、二〇〇三年七月十八日審査終了)

The Graves of OHARA Yugaku Disciples

KOMETANI Hiroshi

The agrarian leadership of OHARA Yugaku at the end of the Edo Period not only influenced agrarian technology and everyday life, but also had an impact on traditional customs. Signs of his influence are to be seen in the grave systems of disciples, even though the demise of Sei-gaku activities was accompanied by a huge shift as these graveyards located in a number of regions were gradually transformed into modern graveyards. This paper defines the grave systems of these Sei-gaku disciples as Sei-gaku graves, and its primary objective is to introduce the circumstances surrounding these graves and related materials to the greatest extent possible. An examination undertaken of the events leading to their formation has revealed points of difference between Sei-gaku graves and local grave systems, and it has also been possible to confirm that their distribution extends along with Sei-gaku activities to Shiga Prefecture. The goal of these disciples was to obtain graveyards solely for disciples that were independent from the traditional grave systems of the region. This deference with regard to graves became increasingly emphasized in the passing down of this objective to the second generation and third generation of leaders, as illustrated by the construction of increasingly robust earthen mounds and the adoption of standardized forms for gravestones so as to distinguish their graves from others.